

勝林寺碑

中国で七世紀（初唐の頃）に、浄土の教えを確立してくださった善導大師。この善導さまが「まことの信心」と示されたことばがあります。

（お）との信心　お祈迦まは至誠心（じしやく）
（こうごん）とお説きになつています。
行為も。ことばも。思いも、如来さまのお
めぐみを仰ぐ中でのものでなければなりません。
一般にいわゆる「信心」は、そと見に
は賢そうな善人づらを見せ、いかにも精進努
力しているそぶりを装つてはいるが、腹の底
には、嘘。ごまかしをいたいでいる、そんな
生き方や信心では駄目です。こんな生き方を
すればするほど、貪慾。憎しみ妬む心。いろ
んな煩惱や偽りごまかしのこころが次々に沸
いてきます。丁度心の深淵から蛇や蝎（さち）
が次々と這い出てくるようなもので、これを
「毒饅頭」の偽善、「ごまかしの人生」と言
うのです。こんな具合の信心や修行をいくら
励んだとて、浄土往生は出来ません。なぜな
ら虚偽ごまかしの垢にまみれた、独りよがり
の信心では、てんで役にたたないどころか地
獄の種を蒔いているにほかならないからです。

「外に賢善精進の相を現ぜられ、内に虚偽を懷けばなり。」

人目に、賢い人・善人・念佛者、あるいは教師づらを現してはいけない。なぜかと言えば、この私、そう力めば力むほど、こちらの中に、虚偽や偽りの煩惱が丁度蛇や蠍(きり)が鎌首を持ち上げるように蠢き湧き出て来るのです」と。

親鸞さまは晩年、この善導さまのおことばを、我が身のうえに照らして次のように和讃で述懐しておられます

淨土真宗に帰すれども
眞実の心は有り難し
虚偽不實のこの身にて
清淨の心もさらになし

外儀のすがたは人ごとに
賢善精進現せしむ
貪瞋邪偽おおきゆえ
奸詐ももはし身にみてり。〔「ももほし」は圓端〕

悪性さらにやめがたし
こころは蛇蝎のごとくなり
修善も雑毒なるゆえに
虚偽の行とぞ名づけたる

以上十六首、これは愚禿（親鸞）が
悲しみ歎きにして述懐としたり
—愚禿悲歎述懐和讃—

20年に及ぶ関東教化も結果は渾身傾け
ただけに親鸞にとつては慘憺たるものであつ
たに違ひありません。

期待をもつて帰つてきた京都は、朝廷や旧
仏教からの彈圧で念佛は禁制され荒涼たる
天地であった。

仏教の教えのなかで僧侶として生きている
人達も、日々占いや祈祷にあけくれ、權力闘
争の渦中にある名ばかりの僧。

「悲しきかなや道俗の
良時吉日えらばしめ
天神地祇をあがめつ
ト占祭祀をつとめとす」

(一)の世の本寺本山のいみじき僧と申す
も法師と申すもうきことなり)

そのうえ妻惠信尼とも離れ、一度義絶勘當
した長子善鸞とそれでも親子の暮らしをせね
ばならなくなつた悲痛な家庭生活。

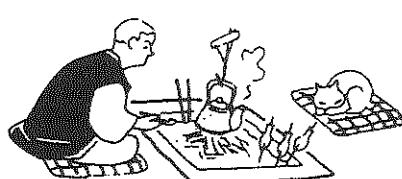
そうした寒々とした晩年の親鸞は、九十歳
の死の床に至るまで、ひたすら師法然を偲び
つづ、「口に世事をまじえず、ただ仏恩の深
きことを述べ。声に余言をあらわさず、もつ
ぱら称名たゆることなし」(「伝鈔」)



太陽と死とは
直視することがむずか
しい
しかし
死から目をそらすと
生きることになる
逃げる

しつこくののしれ
他人の失敗
笑ってごまかせ
おのれの失敗

あなたの職場や団体は　このような人間関係で成り立っていませんか。
これを「差別社会」と言うのです。



そこを思うにつけ、先の善導の文を親鸞が次のように主体的に（わが身のうえに。わがこととして）先のように読み替えたところを親鸞様と同じしぐろになつて改めてもつたいなくいただくのである。

二 二 三 四 四 六 八 九 十 十一 十三 十四 十五 一七 一八 一九 二 二四 二六 二七 二八 三一	一日 (木) 二日 (金) 三日 (土) 四日 (日) 四日 (日) 六日 (火) 八日 (木) 九日 (金) 十日 (土) 十一日 (日) 十三日 (火) 十四日 (水) 十五日 (木) 一七日 (土) 一八日 (日) 一九日 (日) 二日 (金) 二四日 (土) 二六日 (月) 二七日 (火) 二八日 (水) 三一 日 (土)	太田・東里・保谷・日殿 唐川・市場 真覚寺 報恩講 臨時総代会 小田 (托鉢) 合同役員会 小田 野尻・矢根 矢根 出合 (總仏講) 中嶋英樹宅 一・七回忌 暮坂 丸中・片間 百合・桐野・寺坂・日延 石田和俊宅 忌明 口小谷 (總仏講) 口小谷 坂本光隆宅 忌明 斎藤清忠宅 三回忌 出石組忘年会 正福寺前坊守 満中陰 お餅つき 大掃除 除夜会
--	---	---

(敬称略)

東井義雄先生に学ぶ

同じ豊岡市内、但東町佐々木、東光寺住職であり教育実践家であつた「東井義雄」先生は、お父上の代から孫のように弟のように可愛がついていた。戦後の農村で紙芝居伝道を教えていたこと。「お説教」に招いて教えてくださったのも先生であった。八鹿小学校にお勤めの頃、バスの車中でなにくれと学生のわたしに話しかけて頂いたことなど。また、わが寺の掲示を立ち止まって読み、いろいろお教え頂いたことなど、先生の生き今さらに有り難く思い出す。

人生という学校に 七十七年もおせわになつて
結局なになつたか。 醜い 汚れたみすぼらしいじじいになつた。
申しわけない恥ずかしい じじいになつた。
でも やつとおかげさまで
お念佛申す以外、 なにもない私に
していただいた。

平成二年に出版された『老いよ　ありがとう』のあとがきに「あまり利口とはいえない老人の　“いのちの記録”」を書き残す決心をしたと書き、続いて「『記』しました。

☆ ☆

最近「ないおん誌」で、中川某氏の書いて
くださった「東井義雄さん」というタイトル
の文章で、久々に先生に出合わせていただい
た。「若い」をテーマに先生のお姿を描いて
くださっていた。

「老い」は失われていく過程のことではあるけれども得させてもらう過程である。

視力はだんだん失われていくが、花がだんだん美しく不思議に見させてもらえるようになる。

聴力はだんだん失われていくが、もの言わぬ花の声が聞こえるようになる。

蟻の声が聞こえるようになる。

みみずの声が聞こえるようになる。
体力はどんどん失われていくが、あたりま
えであることのたゞごとでなさが 体中に
わからせてもらえるようになる。
失われていくことはさみしいが
得させていただくことは よろこび。
「老い」のよろこびは よろこび。
得させていただく よろこび。

東井義雄先生（平成三年四月　七十九歳で
往生）の生涯を貫いていたものはまさしく
「いのちへの想い」でした。

(東井先生の日記から)

東井先生が交通事故で急逝され、同じ年の七月に私は妻暎子を失った。あれから早や二十年の歳月が流れた。数え切れない方々の「ご恩」「ご縁」「みおしえ」のなかで私はいま八十六歳の老いを生きている。

見えないところがほんものにならないと
見えるところもほんものにならない
「人間が生きているということのただごとで
ないありがたさ。子どもたちにいのちの大
切さを教えるそのためには、わたしたち自
身がいのちへの畏敬の感覚を鈍らせてはなら
ぬ」

「根が枯れでは花が咲かない。根が腐つては実はない。見えないところが見えるところを支える」

お念佛をいただき　いのちを見つめつづけ
た東井先生のいくつかの言葉があります。

平成二年に出版された『老いよう』。ありがとうございます』のあとがきに「あまり利口とはいえない老人の『いのちの記録』を書き残す決心をしたと書き、続いて「『記』しました。

難解語

10

「あの二人、調停・裁判と長年争っていたがトドノツマリは離婚した」。結局、つまるところの意味。「とど」とは魚の「ボラ」(鱈)の成長過程の呼び名。ボラは卵からかえって六月の終わりごろ稚魚となつて海岸に押し寄せる。そのころのものを「おぼこ」「すばしり」と言う。次にそれから川に上り池などに入り体長20センチ丹鳴と「イナ」。さらに川を下り海に入り翌年四月ごろ体長30センチくらいになつたのが「ボラ」。それ以降なお成長しきつた極めて大きいものを「トド」と呼ぶ。

そこで、やがてついに最後にという意味につかわれるようになつたらしい。

「あの二人、調停・裁判と長年争っていたがトドノツマリは離婚した」。結局、つまるところの意味。「とど」とは魚の「ボラ」(鱈)の成長過程の呼び名。ボラは卵からかえって六月の終わりごろ稚魚となつて海岸に押し寄せる。そのころのものを「おぼこ」「すばしり」と言う。次にそれから川に上り池などに入り体長20センチ丹鳴と「イナ」。さらに川を下り海に入り翌年四月ごろ体長30センチくらいになつたのが「ボラ」。それ以降なお成長しきつた極めて大きいものを「トド」と呼ぶ。

そこで、やがてついに最後にという意味につかわれるようになつたらしい。

生き方に 二つある

- 1、生きるべきいのちを
死んでいく
2、死すべきいのちを

医師から見放されると なりふりかまわず
神仏に祈り願をかける。迫り来る死に目をつ
ぶり逃げ回ろうとする。しかし、それでも死
は確実にやって来る。

必ず迫ってくる死。死すべき「無常」なこのいのちを 一日一日どう生きるのか。
「無常」を生きながら それを越える「無量壽」にどう生きかえるのか。それが仏教。

鐘を聞きながら新年を
迎えましょう！！

おつとめ	阿弥陀経	
23:00	除夜会	(正信偈 行譜)
23:20	除夜の鐘	
00:00	修正会	(讚仏偈)
	新年 挨拶	

